

越冬地におけるミヤマガラスの生態 (予報)

山 本 貴 仁*

The ecology of Rook *Corvus frugilegus* in wintering ground.
Takahito YAMAMOTO

Roosting sites and daily behavior of the Rook *Corvus frugilegus* were studied in Tokyo District Ehime Prefecture. The roosts are distributed around the plain, and include other crows.

The Rook has a habitual routine, going back and forth between roosting sites and foraging sites more than 10 kilometer each other. This report is still in progress.

はじめに

調査の背景・目的

ミヤマガラス *Corvus frugilegus* は、ユーラシア大陸に広く分布し、日本へは冬鳥として主に九州地方や本州西南部に多く飛来する。本州の他の地域や四国、対馬、五島列島、大東群島でも記録はあるが、希な冬鳥とされてきた(高野, 1981, 石原, 1982)。

ところが、1980年代に四国や、中国地方東部での越冬が確認され始め、愛媛県では、1984年東予市で越冬が確認された(丹下, 1987)。それ以後、県内において毎年越冬が確認され、飛来数の増加とともに越冬地を拡大する傾向にある。そこで、ミヤマガラスがどのように越冬地を拡大してきたのかを明らかにすることを目的とし、その一環として平成8年度は越冬地でのミヤマガラスの生態について調査を行った。

越冬地において、本種は大群をつくることが多く、その習性はよく知られている。しかし、渡米時期、渡去時期、ねぐら位置、食性、日周行動など越冬地におけるミヤマガラスの生態に関する報告は少ない。今年度は上記の各項目について調査を行い、現在も継続中であるが、調査の概要とこれまでに得られた結果について報告する。

調査地、調査方法

調査は、愛媛県新居浜市、西条市、東予市を中心に行い、周辺の宇摩郡土居町、周桑郡丹原町、今治市でも行った。このうち新居浜市にねぐらを持ち、西条市、東予市で餌を採ね群について主に調査した。

渡米時期についての調査は、西条市、東予市にて行った。

前年に採餌する群れが観察された水田を中心に、10月上旬から自動車巡回し、ミヤマガラスの発見に努めた。個体数については、ねぐらを立つときや採餌中は密集しカウントが困難なため、群れがまばらになるねぐらと餌場との移動中にカウントした。

ねぐら位置については、昼間餌を採る水田からねぐらへ帰る群れを自動車追跡する方法と、見晴らしの良いいくつかの定点からねぐらへ向かう方向を確認する方法を合わせて用いた。

日周行動は、採餌場所が前日と同じ場所であることが多いことから、群れが到着する前に待ち伏せ、ねぐらへ帰るまで終日観察を行った。日周行動の観察と同時に餌と食物についても注意を払った。

結 果

1. 渡米時期及び個体数の変化

西条市及び東予市におけるミヤマガラスの飛来は、10月17日に西条市蛭子の水田に約30羽が飛来しているのが最初に確認された。この初認日は過去の観察記録ともほぼ一致する(山野敬二 私信)。渡りの経路については、不明であるが、愛媛県西宇和郡佐多岬先端において西から飛来するのが観察されている(井上勝巳 私信)。

個体数の変化については、新居浜市をねぐらとする群についてカウントした。その結果、12月にかけて徐々に個体数が増加し、12月28日には約2700羽を数えた(図1)。ただ、後述するように他のねぐらとの間で個体の移動が見られたことから、このねぐらの個体数の変化を表したものはいえない。このねぐらでは、12月以降個体数の減少が見られたが、採餌場所での明らかな個体数の減少が見られないことから、他のねぐらへ移った可能性があ

*愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究科
Dept. of Natural history Ehime Pret. Science Museum

る。採餌場所などでの観察から、12月下旬まで個体数が増加した後安定し、3月上旬から4月上旬にかけて減少していく傾向にある。今年度、個体数の変化については十分な結果が得られなかったことから、カウント場所や方法について検討し再度実施したい。

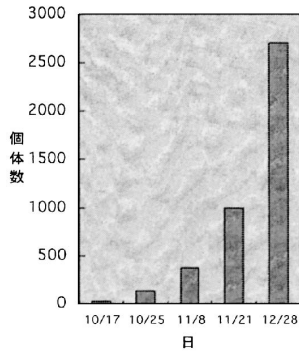


図1. 新居浜市をねぐらとする群れの個体数変化

2. ねぐらについて

今季調査地域内では、2つのねぐら（A、B）が確認された（図2）。また、この2つのねぐらと明らかに別方向に向かう群れがみられ追跡したが、ねぐらの発見には至らなかった。Aのねぐらは、標高約100mの墓地に隣接する雑木林であった。ハシボソガラスとハシブトガラスもねぐらを共にしており、常時ミヤマガラスと行動を共にしているコクマルガラスと合わせると4種のカラス類がねぐらを共有していることになる。このねぐらを昼間観察したところ、ハシブトガラスとハシボソガラスが見られたが、ミヤマガラスとコクマルガラスは確認できなかった。ねぐら入りの前に約1km離れた場所に就峙前集合がみられ、しばらくした後一斉に飛び立ち、ねぐらの上空で完全に暗くなるまで旋回する行動が見られた。Bのねぐらは、標高約300mのスギ植林地にあり、Aのねぐら同様他のカラス類もねぐらを共有している。就峙前集合の場所は約1km程離れたカキ果樹園であり、ねぐら入りの行動はAのねぐらと同様であった。就峙前集合で、ミヤマガラスの群れに混じる少数のハシブトガラス、ハシボソガラスがみられたが、多くは種ごとに別の場所に集合しねぐらで合流していた。

ねぐらの位置については、日中の主な行動地域である平野部の周辺であるといえる。しかし、更に採餌場所に近い場所にもねぐらに似た環境は存在する。Aのねぐらの場合、採餌場所までの距離は17~18km程度、Bのねぐらは12~13km程度離れている。双方のねぐらから飛び立ったミヤマガラスは同じ水田で混ざり合って採餌することがある。この場合は、Bのねぐらのミヤマガラスの方が近いため、Aのねぐらのミヤマガラスより早く餌を採り始める。ねぐらへの移動に費やすエネルギーを考えて

も、ねぐらと採餌場所は近い方が有利であると考えられる。今後どのような条件によってねぐらの場所が決定されているのか調査していきたい。

3. 日周行動

ねぐらを出るのは日の出前で、かなり密集して飛び立つ。昼間ねぐら周辺でミヤマガラスが見られないことから、全ての個体がねぐらから出ていくものと思われる。ねぐらを出たミヤマガラスは、途中いくつかの高圧線の鉄塔で休息しながら餌を採る水田に向かう。休息する鉄塔や電線はほぼ決まった場所であることが多い。ねぐらを出た時は密集している群れも徐々に帯状になり、いくつかの群れに分かれる。そのため、採餌場所に到着する時点で先頭の個体と最後の個体では1時間もずれることがある。群れの別れ方は、移動経路の途中で分岐する場合と、採餌場所に着きしばらく餌を食べてから分かれる場合がある。雨や曇りの日は、晴れた日に比べて採餌場所に到着する時間が遅れる傾向にある。餌を採る場所は、何日か続けて同じ場所であることが多い。その日採餌する場所に到着した。最初の集団は近くの高圧線などでしばらく様子を見かね、やがて地面において採餌する。その後続く群れは、直接地面において餌を採り始める。

新居浜市をねぐらとする群について、採餌場所に到着してからの行動を追跡した。（図3）その結果、日中は小規模な移動を繰り返しながら餌を採り、夕方まで過ごすことが分かった。餌場を移動するときは最初10~30羽程度が飛び立ち、それに続くように徐々に移動する。驚いたときには群れが一斉に飛び立つが、それ以外の飛び立ちは行動を起こした小群れに続くかたちで起こる。採餌場所へ着いた群れは、10月の個体数が少ないうちは、一日中行動を共にするが、個体数が増えるにしたがっていくつかの群れに分かれるようになった。

ねぐらへの移動は、早い時で午後2時頃から始まる。これも、天候によって時間の早遅がみられる。移動経路は朝と大きくは変わらないが、数十羽~数百羽の単位で採餌場所から飛び立つことが多い。朝の移動と同じように、鉄塔などで休息しながら近くに集結する。採餌場所からねぐらへ飛び立つ時、同じ場所で採餌していた群れの中の何羽かが別のねぐらへ向かうことがよく観察された。別々のねぐらから飛来した個体が混ざり合って採餌することもあるため、それらがそれぞれのねぐらへ帰ったと考えることもできるが、ねぐらの場所は一定でも、構成する個体は採餌場所を介して流動的であることも考えられる。移動及び行動圏をさらに明らかにするには、個体を特定して行う必要がある。そのためにはミヤマガラスを捕獲しなければならないが、今後捕獲方法を含めて、検討していきたい。

図2. 調査地域内におけるミヤマガラスのねぐら及び採餌場所への移動経路
国土地理院発行1/50,000地形図「西条」「新居浜」「今治東部」を縮小編集

